

震災孤児思う戦災孤児

3.10東京大空襲

伝えたい「苦あれば楽あり」

10万人もの犠牲を出した東京大空襲から10日で68年。空襲で両親をなくした人の中には、東日本大震災の孤児に自分を重ね合わせる人もいる。あの日からどう生きてきたかを語ることで、震災で家族を失った子どもたちの心に寄り添えないか。空襲の孤児だった人たちが模索を始めている。
(鶴田裕介)

茨城の吉田さん

1945年3月9日、疎開の支度をしていた家族から「チョロチョロ走り回って準備が出来ないで、近所の母の実家に一晩の約束で預けられた。当時3歳。それが運命の分かれ道となった。翌日未明、火に包まれる街の中を、叔母に背負われ逃げまどった。ことは後に聞いた。記憶に残っているのは、大量の火の粉が舞い、街がともも明るかったことと、かいだことのない複雑なおいだけだ。

高校卒業後、百貨店に就職。結婚し、2人の子どもにも恵まれた。今は「田舎暮らしがしたい」と茨城に建てた家で夫と過ごす。この幸せな日々は、教師たちの「いつか報われる日が来る」という言葉を信じて生きてきた結果だと思ふ。

◆ 体験語る活動

東日本大震災で親が死亡したり、行方不明になったりして「震災孤児」となった18歳未満の子どもは241人。ほとんどは親戚に引き取られていったという。

東日本大震災で親が死亡して経験を語りたいたいと話している。戦災孤児らで震災孤児支援のために集めた募金は100万円以上上った。

◆ 3歳家族失う

東日本大震災の後、海に向かって「お父さん！お母さん！」と叫ぶ子どものニュース映像が、半世紀以上前の自分の姿と重なった。「あの子が幸せな人生

を送れますように」。東京大空襲で親を亡くし、つらい幼少期を送った茨城県鹿嶋市の吉田由美子さん(71)は胸を詰まらせた。

◆ 親戚宅を転々

戦時中、吉田さんは現在の東京都墨田区業平に両親と妹の4人で住んでいた。本当につらい人生はその後に訪れた。群馬、東京、新潟と、親戚宅を転々としながら、両親を迎えにくる日を待ち続けた。6歳の時、親戚から「親と一緒に死んでくれればよかったのに」と言われ、初めてあの空襲で両親と妹が亡くなったことを知った。



たった1枚残されていた家族写真を手に、孤児としてのつらい経験を語る吉田さん

身を寄せた親戚宅では掃除、畑仕事などに追われ、悲しむことすらできない。唯一の救いは学校。小学3年の時、表情の乏しい吉田さんを気にかけた女性教師は、放課後、ヘレン・ケラーや野口英世の伝記を読ま

ると、被災地にも出向いて経験を語りたいたいと話している。戦災孤児らで震災孤児支援のために集めた募金は100万円以上上った。

伝えたいのは「苦あれば楽あり」という言葉。「陳腐な言葉かもしれない。けれど、本当の事なんです」。同じ境遇の者だけが伝えられる言葉だと思っている。